

会派行政視察報告書

報告者（会派等） 未来

1. 視察日	令和7年2月19日（水）
2. 視察テーマ	自伐型林業について
3. 視察目的	森林の所有や管理が、お荷物ではなく価値を生み出すことができる小さな林業の仕組みづくりについて調査するため
4. 視察先	福井市「一般社団法人 美山きときとき隊」
5. 概要	座学および施業済み現場視察
(1) 現行の森林保全の課題	①森林蓄積の増加＝森林伐採の減少 森林面積はここ50年以上ほとんど変わっていないが、森林蓄積は80年間でおよそ3倍にまで増加している→森の老化は森の衰退につながり、「地球温暖化防止機能の低下」「土砂災害の増加」「水源涵養機能の低下」をもたらす ②所有者不明林の増加 登記簿上の所有者不明林の割合は「28.22%」、所有者はわかっているが遠隔地在住の不在林者保有森林面積は「24%」、経営管理が行われていない森林は私有林のおよそ2/3まで増加 ③林業従事者の人手不足・高齢化 林業従事者の数は40年間で70%減少、高齢者率は25%まで上昇 ※これらは全て現在も進行しつつあるものであり、早急に未来を見据えた策を施さなければならない
(2) 森林施業の必要性と生業としての林業の成立	(1)の課題は林業が経済活動として成立しにくいことに起因しており、森林所有者が受益できる林業の仕組みの構築が喫緊の課題。現在の林業の主流は、大きな施業体による大規模な林業だが、それでは逆に採算がとりにくく、結果として林業従事者の幅広い継承にもつながりにくい。また、大規模な林業には大規模な投資が必要となり、参入者の障壁となっている。また大規模作業者が入ることのできる作業道が必要となるが、それ自体が山を痛めつけ、結果として災害が起きやすい山林にしてしまっている現実がある。 一方で自伐型林業は、他の仕事との兼業で行うことが基本であり作業も1～2人で行うことのできる、例えばD I Y的な林業である。軽トラック1台が通れる作業道を小型の重機で自らが整備する（山相や水道を見定める少し専門的な研修は必要）ことから始まるが、その林道は最低限の立木伐採しか行わないため、隙間を縫って比較的密に走っているにも関わらず、意外にも災害に非常に強いことが立証されている。倒した材木は、その場で建築材のサイズにカ

		ットし、軽トラックに載せて運び出す。運び出しにおいても林道をうまく配置していることにより作業はしやすく、作業者への負担は極めて少ない。ペレットやチップ用材には端材のみを利用し、本体は建築用材として直接市場に持ち込む。建築用材のサイズも確定できている付加価値も加わり、立米単価は9,000円程度で取引されている。契約している山林所有者に配分を行っても、副業としてならば十分に成り立つ。
(3) 行政支援について		〈福井市の目指す林業〉 「伐って使って触れ合って未来に引き継ぐ森林づくりの推進」の基本理念の基、中長期的視点で計画を立案及び実施していく。3つのビジョンから福井市の目指す現在&未来の林業像を描く。 ①森林の多面的強化 ②担い手の確保・育成 ③林業の成長産業化の推進 ⇒これらのことから、自伐型林業は大変に有効な方向性として、福井市は次の市の独自支援制度を設けている ❶U・Iターン見学補助金 ❷U・Iターン就業奨励金 ❸自伐型林業大学校 ❹林業経営体ステップアップ事業 自伐型林業を知り、学び、就業して地域に根を下ろし、所有者と契約を交わして作業を行って利益を得る生活スタイルを定着させることが目的であり、現実に自伐型大学校卒業者は地域内外のキーマンとして育成されている。定住するのではなく、技術を学んで他市・他県で就業する若者も多い。その場合は❶❷❹の支援制度は活用できないため、就業地での支援は確実に必要となる。



5. 考察・感想	大規模林業が短期的な生産量を追求するのに対し、自伐型林業は間伐を繰り返して森林資源の蓄積量（在庫）を増やし、長期的な視点で持続可能な森林経営を目指す、小規模で進める林業である。 壊れない道を高密度に張り巡らせることで、いつでも山に入れる環境を整え、木材の搬出コストを削減。これにより、低投資・低コストで取り組める林業が実現し、現状の材価でも収益が得られる点で注目されている。採算性と環境保全を高い次元で両立する持続可能な森林経営は、参入障壁が低く、多様な人々の就労を可能にする。国土の7割を占める山林を活用する「地方創生の鍵」として期待され、全国各地で広がりを見せている。近隣県の福井県でも自伐型林業経営者を育成・普及させ、北陸での広がりや里山再生の主力となるよう、活動が着々と進められている。 自伐型林業は、限られた森林を永続的に管理し、その森林から持続的に収入を得ることを目指した、山林所有者や地域が経営や管理、施業を自ら担う自己責任型の林業である。収入を向上させるためには、木材の質を高めたり森を多目的に活用したりするため、森を良好に維持することが欠かせない。収益向上と良好な森づくりを両立させる、地域に根ざした持続可能な環境保全型林業です。 災害時での活躍 自然災害が急増する中、小型の重機や林業技術が地域の波及・復旧に大きく貢献できていると感じている。除雪だけでなく、倒木処理や土砂の除去など、自伐型林業従事者は災害時にも幅広い活躍が期待されている。大規模林業では道の崩壊につながる危険性を感じる場所が多く見受けられる。山側の切り高は何メートルにも及び、山が分断されて登ることも困難な状況がある。山林管理で最も難しいのは水の管理。特に大規模な道では排水処理が大きな課題となっている。20－30メートルおきに水の流れを考慮した適切な排水処理が必要である。 自伐型林業の特徴 長期的視点に立ち持続可能な森林経営を行い、環境保全・共生型の施業を展開し、木材生産だけでなく森業・山業的な仕事を生み出す。大きな機械投資は必要なく、2tトラック、3tクラスのミニバックホウ、林内作業車程度でよく、すべて揃ってなくてもスタートでき、また、副業から始められ、低投資で参入が容易であるため地域が対応しやすく、就業力も現行林業に比べ10倍近く大きいということも分かってきている。 この優れた林業が、日本において新たな展開ができれば本当の林業再生のみならず、中山間地域にとっては再生の大きなきっかけになる。都市からの大きな人口還流をおこ
-----------------	--

すことも可能となる。このような自伐型林業に高山市も積極的に取り組むべきである。持続可能な地域づくりの大きな活力源となる。

